

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第29巻4号(通巻184号) 2008.1.22

vol.29

NO.4

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

山本佐門

## 2 「大衆操作」の危機と新聞ばなれの若者達

大濱徹也

## 3 大地の貌を読む

山ノ井高洋

## 4 読書が誘う<sup>いざな</sup>仮想世界

菅原秀幸

## 5 経営学はなんのためにある？

## 6 2007年度図書館利用ガイダンス アンケート結果速報

逸見宜義

## 8 経済学のすすめ

編集後記

# 「大衆操作」の危機と新聞はなれの若者達

文＝山本佐門  
(やまもと さもん／法学部教授)

「情報革命」の進展とともにマスメディアの政治的影響力の強まりが一段と注目され、「メディア政治」さらには「メディア民主主義」という呼び方も定着しつつある。とりわけ近年の国政選挙にあつては、マスメディアの報道姿勢如何では5～10%の有権者の投票行動を変化させるのは容易であることが立証され、小選挙区制を主体とした現行選挙制度と連動して、選挙戦の帰趨に決定的な作用をもたらしている。05年9月の「郵政民営化選挙」では結果的に日本のテレビ、新聞・雑誌は様々小泉首相の政治手法と訴えを美化し、増幅して国民に浸透せしめた。他方今次の参院選では、国民年金記録の不備から「政治と金」をめぐる閣僚・与党幹部の不始末までその実相、問題性を終始執拗に国民に報じ続け、政権への国民の信頼感を大きく揺るがした。

こうしたメディア効果の異常ともいべき強まりの中で、もし「大衆操作」の意義と手法を熟知した強力な政治的指導者が積極的かつ意図的にメディアを利用しようとしたらどうであろうか。「宣伝の技術はまさしく、それが大衆の感情的観念界をつかんで、心理的に正しい形式で大衆の注意を引き、さらにその心の中に入り込むことにある。(中略)大衆の受容能力は非常に限られており、理解力は小さいが、そのかわりに忘却力は大きい。この事実から全ての効果的な宣伝は重点をうんと制限して、スローガンのように利用し、その言葉によって、目的としたものが最後の一人にまで思い浮かべることができるように継続的に行わなければならない」(A. ヒトラー『わが闘争(上)』(角川文庫版))

こうした大衆観に基づき、改革か抵抗か、肯定か否定か、善か悪か、正か不正かといった形式に政治的課題を極度に単純化し、攻撃的に打ち出す戦術がマスメディアを通じて全面的に展開された場合、これに抗し得る術を現在の我々は持ちえているであろうか。様々な手法でメディアを通じて伝達される政治情報を主体的に受け止め、熟慮・決断しえる構えが民衆の側にどれほど確立されているのであろうか。

このことに関して、いささか衝撃的な調査報告を紹介しておこう。NHKが5年おきに実施し

ている「国民生活時間調査」でのメディア接触度である。05年の調査では(サンプル数約8000)、国民の90%は毎日(平日)平均3時間29分もテレビに接している一方、新聞に対しては44%、21分という結果であり、しかもテレビ依存の強さはこの10年継続しているものの、新聞についてはなお後退傾向にある。更にこれを青年層(20代)、学生層に限れば「新聞ばなれ」の傾向は一層顕著である。毎日15分以上新聞を読む者は青年層(男)で21%(10年間で-10%)、学生層で9%(-6%)であり、平均接触時間については青年層でたった6分、学生層ではなんと3分という有様、これでは新聞を読んでいるとはとても評し得ない。

青年・学生諸君は一体どこから政治情報を得ているのであろうか。テレビに加え最近ではインターネットからの可能性が指摘されている。しかし目下のテレビ、インターネットの政治情報の伝達傾向は新聞のそれに比して、短絡的かつ情動的であり、先述のヒトラー的宣伝攻勢により適合的ではないか。メディア効果を強く意識した指導者達の大衆操作に取り込まれないためには、なによりも情報把握→熟慮→慎重判断という思考回路の形成が必要であり、それには少なくとも日刊紙の丹念な読み込みの習慣化が不可欠だと思う。

「現代政治とマスメディア」が基本テーマの今年の私の学部ゼミでは、目下「新聞は生きのこれるか」を課題に検討中である。そこでは「新聞不要論」も飛び出したもののどうやら「新聞は死なず」というまとめに落ち着きそうだ。しかし肝心のゼミ生自身の平均新聞接触時間は15分、三分の一の者がほとんど新聞を読まない(テレビ視聴時間の方は平均2時間12分)という現状にある。さらに5冊以上表示を義務付けている毎回の「報告参考文献リスト」では著書、論文の類に替わりホームページアドレスが幅をきかせ、とりわけかの有名な百科事典の表示がやたらと目に入る。

これで権力者達の巧妙な大衆操作の攻勢に対抗しえる市民が育つてゆくのだろうか、なんとも気がかりな若者達の動向である。

# 大地の貌を讀む

文＝大濱徹也(おおはま てつや/人文学部教授)

日常の場から世界を読みとる作業は、易しいようでいて、きわめて難しい営みです。この作業の基本は、宮本常一に言わせれば、「歩く、見る、聞く」にこめられた世界となります。この世界から見てくるのは、わたしに言わせれば、「勝手口の目」にほかなりません。

グローバルな言説が世間の相場となっている昨今、問われるのは、状況に埋没し、流亡の民とならないためにも、己の立つべき場は何処にあるかを己の眼で確かめる作業ではないでしょうか。そのためには、よるべき大地、生きて在る場をいかに確かめ、己のものにしていくかが問われています。日常的に眼にする風景は、眺めているようでいて、どれだけ視ているかと問われれば、確かとは答えられません。眼にすれど視ていないのが現実です。すべてを視たら錯乱しましょう。それだけに視るべきものを如何に読み解き、己の世界を構築するかが問われます。そのための眼が勝手口、日常の場から世界を撃つ営みであり、「歩く、見る、聞く」という作法を支えるものではないでしょうか。

宮本常一は、一教師として村に赴任した時、ひとり一人の生徒を知らずに何が語れるのかとの思いにとらわれました。教師として居る場を視ることなく、何が出来るのかとの問いこそは、宮本常一の「民俗学」にほかなりません。宮本は、生徒が生まれ育った場、地域を知る、そこの生業、暮らしの形などを村の住民に教えてもらうことから、教師としての己が立つべき場を築こうとしました。この想いには教育の原点があります。その初心が後に「歩く、見る、聞く」にこめた想いといえましょう。現在、この大地を読みとる眼がどれほどわたしたちの共有する想いとしてあるのでしょうか。

グローバルな潮流は、瞬時に多様な情報を手にしうる状況下で、人間ひとり一人の個性を奪い、匿名化していくことで、存在感が希薄な社会をもたらしています。仮想空間を現実視し、インターネットの世界でしか世間を読みとれない状況は、空中楼阁にしているようなもので、浮遊しているにすぎません。それだけに己の足で大地を歩み、己の世界を手にした。そのためにも土地の貌ともいうべき地貌を読みとる眼を身につけたいものです。

土地の相貌を提示した一つの世界といえる博物館、郷土館などは、大地に刻まれた営み、暮らしの形である文化を体現してこそ存在する意味があります。月形樺戸博物館、三笠鉄道記念館、夕張市石炭博物

館などはその典型といえます。しかし三笠も夕張もいまや廃類の淵に立たされている由、なんとも口惜しきことです。その背後には、館が持つ世界の固有性を問い質す眼を失い、館を場に己が地域の存在を問いかけていこうとする哲学、己の思いを他者に語りかけることもせず、世間の潮流に身を任せた愚があるのではないのでしょうか。この地貌を読みとることが現在ほど求められているときはありません。

大地が奏でだす相貌ともいうべき地貌は、「地球市民」なる寝言を喧伝する痴れ者の声高なお喋りの前に、経済効率性の論理で破却されようとしています。しかし地貌には、民の営みが築いてきた世界があり、産土の山川草木が奏でる小宇宙、人びとの暮らしの原点が刻まれています。それだけに地貌を読み解く作業は、学び問う営みの原初であり、生きて在るわたしの場を確かめるうえで欠かせません。勝手口から歴史を、社会を、世界を読み解くのはその第一歩といえましょう。

この地貌によせる眼は、グローバルな視点を自明の「真理」とみなす潮流に対峙し、己が固有の場にこだわり、世界を問い質そうとの想いとなります。現在求められるのは、この想いを我がうちに秘め、大地の営みを我が手にし、明日への道を想い描くことではないでしょうか。信州大学医学部教授宮坂静生さんの『俳句地貌論』(本阿弥書店 2003年)『かたりかける季語 ゆるやかな日本』(岩波書店 2006年)は、「ことばには貌がある。そのことばが使われている土地の貌がことばに映しだされている。私はそれを「地貌」のことばと呼んでいる」となし、地貌を詠んだ句を紹介しています。北海道の貌は次のようなものとして。

幻水の樓閣築きオホーツク 早川英夫  
クリオネのつばさひらひら波に消ゆ 木村敏男  
蝦夷梅雨のたそがれ早し坂の町 澤田弘毅

網走沖に立つ屋気楼、オホーツク沿岸に訪れる海の天使クリオネ、坂の町小樽か函館の潤んだ灯、それぞれに大地の息づかいがたたよっています。この『俳句地貌論』にふれたとき、石川啄木の歌を思い出しました。

しらしらと氷かがやき 千鳥なく 釧路の海の冬の月かな

ここに詠まれた地貌は、大地に刻まれた民の歩みと重ね、時間を旅する営みで想起したとき、新しい歴史を描くことを可能にしましょう。詩歌は、想像力の翼をはばたかせ、時代を読み解く鍵を秘めています。大地の貌に想いをはせ、日常の場から時代を把握したいもの。

# いざな 読書が誘う 仮想世界

文=山ノ井 高洋  
(やまのい たかひろ/工学部教授)

映画評論家の淀川長治さんが、生前に、映画は自分の知らない様々な世界や人生を見せてくれると言っていた。映画は、私が現在研究している脳科学の視点からは、AudioとVisionの2種の感覚入力から脳において時空間の仮想世界を構築していると考えられる。一方、読書はVisionの1つの感覚入力から同様の仮想世界を構築している。マクルーハンによればホットとクールの違いである。脳の活性化にはどちらが良いかは自明であり、脳トレーニングにはニンテンドーDSより読書が良いに決まっている。ちなみにヒトの五官の中で、単位時間あたりの情報処理能力が高いのは、視覚であり、その次は一桁落ちて触覚である。点字、マージャンの盲牌などはこの理にかなっている。

私の学生時代の読書体験の一部を披露することで、学生さんに何かの参考になれば幸いである。高校生のとき、「相対性理論」を読もうと矢野健太郎訳を借りたが、マトリックスに阻まれ、これを理解するため高木貞治の「解析概論」を読み出したところ面白くなり、数学にはまった。芋づる式読書である。後に大学で工学部ながら微分幾何学をかじり相対論は分かった。この頃は英語のサイドリーダーを読まされた影響で、原著でペンギンブックス等のペーパーバックを読んだ。

大学では数理科学に連載の安本美典の邪馬台国を比定する数理歴史学に夢中になり、統計学にはまり込んだ。卒業研究ではフランス語の原著をテキストにE.カルタンの「面積空間論」、「フィンスラー空間論」を先生と1対1のゼミをさせてもらった。後にHermann社の1971年の復刻合本版を見つけ懐かしくて手に入れた。修士のとき友人の家で本多勝一の「殺される側の論理」を本棚に見つけ、その後彼の著作はほとんど読んだ。このころ原著では「ペリカン文書」、「第3の波」などを読んでいた。

外国語を覚えるのには推理小説や随筆を読むことをお勧めする。推理・推論することにより、知らない単語を文脈から想像し、さくさくと先に進められ、しかも言語と同側にある論理を司る部位のある左脳を使うからである。もちろんイメージを作り上げるから右脳も大いに使う。

博士課程のときデカルトの「方法序説」をフランス語会話教室で知り合った友人とその弟さんと



土曜講習の後に輪読した。幾つかの版や解説書も読み、『我思う故に我あり』は je pense, donc je suis. がデカルトの最初の表現であって、知識階級が書物を書くときに使っていたラテン語ではなく、彼が一般の人に理解して貰う目的のためにフランス語で「方法序説」を書いた精神にすっかりほれ込んだ。哲学で良く引用される cogito, ergo sum. はそのラテン語訳である。その後「屈折光学」で、彼が牛の眼球で実験し、眼球は射影光学的な処理をしていることを導いたのに感動した。ちなみに、『我思う故に我あり』は、今研究しているブレインマシンインターフェースの視点からは、仮に、種々の電氣的に現実と等価な脳への入力があったとしたら、生体ではこれを現実と区別できないから、脳でそれを考え、構築している事実だけは疑えない。このことをデカルトは考えたのではないかと私自身勝手に思っている。

このようにして、私自身は左脳の言語野と右脳の想像力を養った。国際会議で海外に出かけた時には時間があれば本屋を覗いてペーパーバックを購入してくる。読書によって私自身が様々な仮想世界を創造出来たことをありがたく思っている。さらに、母語だけでなく、英語とフランス語により仮想世界のみならず海外での現実世界を感じる事が出来たことも。

# 経営学は なんのためにある

文＝菅原秀幸 (すがわら ひでゆき／経営学部教授)

天才投資家としてその名をとどろかせたジム・ロジャーズは、10年で4000%を超える驚異的なリターンを実現し、37歳で引退。その後彼は、コロンビア大学のビジネススクール（経営学専門職大学院）で教鞭もとり、「ビジネススクールに通っても、お金と時間の無駄だ。実際のビジネスで成功経験のない教授たちの教える経営学は何の役にも立たない。世界を旅して、実際に自分の目で見て、耳で聞いて、体で感じるのが何より大切なのだ」と学生たちに説いています。

「国際経営論」を専門とする私には、ジム・ロジャーズのこの言葉はぐさりと刺さります。私もまた、「実際のビジネスで成功経験のない」一人だからです。大学院に進学し、経営学の一領域である国際経営論を専攻して学び始めた頃から、国際経営論の意義とは何だろうと、自分自身に問い続けてきました。

「経営学は何のためにあるのか」、「経営学は実際に役に立つのか」という問いかけが、しばしば批判的な意味合いをもってなされてきました。つまり、暗に「経営学は現実には役に立たない」と言われてきたのです。

確かに、学会の中だけで行なわれている、社会との接点のないテクニカルな議論を見る限りでは、経営学は経営学者が生計を立てるためにあるのだということになるでしょう。しかし、それだけに留まっているわけではありません。では、経営学の役割とは、経営学の意義とは何なのでしょう。

「企業の経営は、サイエンスとアート」と言われます。つまり、企業経営には科学的側面と芸術的側面があるということで、そのどちらが欠けてもうまくいきません。この科学的側面をになっているのが、経営学です。ですから、もともと経営学だけでは企業経営には不十分なわけです。しかし、個人のセンスや経験に大きく依存する芸術的側面だけでも限界があり、どちらも不可欠なのです。

このことは、「理論と実践は密接不可分（車の両輪）である」とも言われています。理論だけでも、実践だけでも不十分で、両者は車の両輪のように、どちらが欠けてもうまく前進できないというわけです。「実

践なき理論は机上の空論であるが、理論なき実践は無謀な冒険である」のです。優れた理論は、実践に威力を発揮するのです。科学的側面と芸術的側面をもつ企業経営には、経営学の実践的理論に加えて経営センスと経験が必要です。どちらかに偏ってしまうといけません。

経験偏重については、「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という戒めの諺があります。自分の経験には限りがあるので、経験だけに基づいて物事を判断していると、誤ってしまうわけです。経験から得られた教訓は、過去の限られた時点における、限られた状況の中でのみ成り立つということです。今日のように変化の激しい時代には、自分の限られた経験はすぐに役立たなくなってしまう。そこで歴史に学ぶ必要が出てきます。つまり、他の多くの人たちの経験を通して、そこから得られた共通の教訓を学ぶことが大切になります。歴史は人間の英知の結集です。

この歴史とは、理論とも言い換えることができます。理論とは、多くの場合に通用する法則です。つまり歴史や理論を学ぶことは、私たちが物事を判断する際にとても役立つのです。そして、歴史や理論を学ぶのに最適な期間が大学時代であり、最適な場所のひとつが大学の図書館です。

しかし、こうして学んだ歴史や理論も、ただ知っているだけでは、宝のもち腐れです。「知は力なり」とは、フランシス・ベーコンの有名な言葉ですが、表現としては不十分でしょう。これは正確に言うと、「知識は実践に活かされて初めて力となる」ということです。知識に裏打ちされた行動こそが重要なのです。ですから大学で学ぶ知識も、実践に活かされてこそ価値を発揮します。この意味で、経営学はまさに現実に活かすことのできる実践的な学問です。

ジム・ロジャーズの著書を読むと、理論と実践の両方の大切さが分かります。『冒険投資家ジム・ロジャーズ世界大発見』（日経ビジネス人文庫、2006）、『冒険投資家ジム・ロジャーズ 世界バイク紀行』（日経ビジネス人文庫、2004）の2冊はお勧めです。

2007年度

# 図書館利用 ガイダンス

## アンケート結果速報

今年度4月より、図書館では従来行ってきた「図書館見学」を大幅にリニューアルし、「オリエンテーション」「文献検索セミナー」というゼミ対象のガイダンスをスタートしました。その際、参加者の皆さんに記入していただいたアンケートの集計結果がまとまりました（2007年12月現在）。

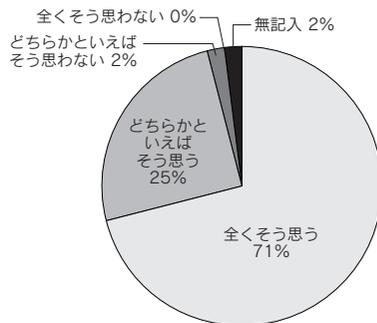
※ここに掲載されているアンケート結果は一部のみです。アンケート結果の詳細（2007年度完全版）や今後のガイダンス日程等につきましては、図書館ホームページに随時アップロードしていく予定です。

① **オリエンテーション** 主に新入生を対象に、図書館の基本的な利用方法を説明します。本の探し方から貸出・返却方法、閲覧室の見学なども行います。

参加者数 / 567名  
実施期間 / 2007年4月～2007年12月（2008年3月まで申込受付中）  
実施回数 / 45回

今回のガイダンスに参加してよかったですか。

	人数(名)	構成比(%)
全くそう思う	405	71
どちらかといえばそう思う	139	25
どちらかといえばそう思わない	9	2
全くそう思わない	1	0
無記入	13	2
合計	567	100



満足できた点・満足できなかった点について、具体的に記入してください。

### 【満足できた点】

- Ⅰ. わかりやすかった（説明の仕方、聞きやすさ、丁寧さ、構成など）・親切だった。
- Ⅱ. 図書館を今後利用したい。
- Ⅲ. 本の数・種類が多くて驚いた。
- Ⅳ. 楽しかった・おもしろかった、書庫に入れてよかった。

担当講師からのコメント 数々のご意見、大変励みになります！ 支持していただいた部分は継続し、より良いガイダンスにしていきたいと思います。

### 【満足できなかった点】

- Ⅰ. もっと少数で説明してほしい、自由時間ももっと欲しかった。
- Ⅱ. 丁寧すぎて飽きた。
- Ⅲ. エレベーターが怖い・修理してほしい。
- Ⅳ. 館内が暑い・書庫の換気が悪い、図書館のスペースが狭い。
- Ⅴ. 全員にOPACの検索をさせて欲しかった。
- Ⅵ. ガイダンスは強制ではなく希望者のみでいい。

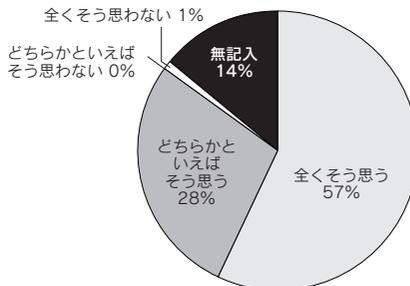
担当講師からのコメント Ⅰは出来る限り実現させます。Ⅱ…(^ ^)A Ⅲのエレベーターですが、点検では問題ないんですよ…Ⅳ、そうですね、今後も館内環境の整備に努力していきます…皆さんの声が力になります!!! Ⅴは時間の都合上難しいかと…でもOPACはいつでも使えます。わからない時は聞いてみて下さい。Ⅵは先生にも相談してみてくださいね。皆さんの意見を参考に、さらなる充実を図っていきたくと思います。今後ともよろしくお願いします。

**②文献検索セミナー** 主に2年生以上を対象とし、オンライン・データベース等を駆使しながら、必要な文献を入手するための方法を説明します。

参加者数 / 162名 (1年生:19名、2年生:65名、3年生:57名、4年生:18名、不明:3名)  
 実施期間 / 2007年6月～2007年12月 (2008年3月まで申込受付中)  
 実施回数 / 12回

**今回のガイダンスに参加してよかったと思いますか？**

	人数(名)	構成比(%)
全くそう思う	92	57
どちらかといえばそう思う	45	28
どちらかといえばそう思わない	0	0
全くそう思わない	2	1
無記入	23	14
合計	162	100



**満足できた点・満足できなかった点について、具体的に記入してください。**

**【満足できた点】**

- ・今まで全く文献(論文)入手の仕方を知らなかったのでも勉強になった。
- ・過去の新聞記事がこんなに簡易に検索できるとは思わなかったの、知ることができて良かったです。
- ・パソコンを使いながらガイダンスを行ったので、理解度が全然違った。細かい所まで説明してくれたので、難しいことも容易に理解できた。

- ・私はパソコンがすごく苦手で、これらを利用する機会がなかったけど、講師の説明はすごくわかりやすく理解できました。
- ・とてもわかりやすかったです。知らないことばかりで、特に新聞検索はこれから就活などにも役立ちそうだと思います。

**担当講師からのコメント**

今後とも、全ての参加者にとってわかりやすい説明ができるよう心がけたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**【満足できなかった点】**

- ・もう少し、演習というか、問題のようなものを解く機会が多いといいと思う。新聞の記事検索とかは普通の検索とは少し性格が違うと思うので、もう少し練習したかったです。

- ・時間がなくて全ての説明を聞くことができなかった事。
- ・HP間のリンク(例えばCiNiiに行くとか)があまりわかりにくい。たどりつく前に少し迷った。

**担当講師からのコメント**

不慣れな進行により、大変ご迷惑をおかけしました。今後は参加者の反応に気を配る一方で、演習問題を解く機会をなるべく多く設けたいと思います。

**図書館利用ガイダンスに関する意見や要望などがあれば、自由に記入してください。**

- ・ちょっと進行が早いと感じるところがあったので、もう少しじっくり進めてもいいのではないのでしょうか？
- ・今4年生なのですが、今頃になって初めてガイダンスを聞きました。1年生の頃からもっと強制的にでも皆に

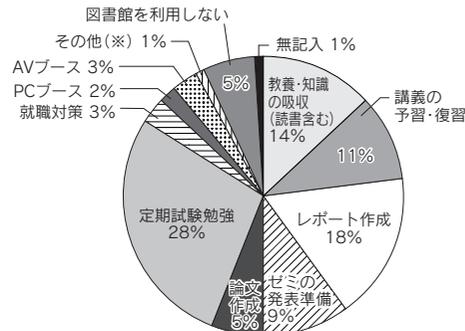
- 聞かせた方が良いと思います。
- ・このまま定期的に続けて下さい。卒論執筆する学生には非常に助かります。

**担当講師からのコメント**

より多くの学生が、大学入学後のなるべく早い段階にガイダンスを受けられるよう、よりよい形を今後模索していきたいです。

**日頃、どのような目的で図書館を利用しますか。(複数回答可)**

	人数(名)	構成比(%)
教養・知識の吸収(読書含む)	48	14
講義の予習・復習	37	11
レポート作成	61	18
ゼミの発表準備	32	9
論文作成	17	5
定期試験勉強	97	28
就職対策	10	3
PCブース	7	2
AVブース	12	3
その他(※)	4	1
図書館を利用しない	19	5
無記入	2	1
合計	346	100



※その他: 教授の勉強(1名) / つかの間の休憩(1名) / 新聞(1名) / 物書き(1名)

# 経済学の すすめ

## 文=逸見宜義

(へんみ のりよし/経済学部講師)

“なぜ豊かな国と貧しい国が存在するの？”これが私の研究テーマです(というよりは、この問題への数ある取組みの中に私の研究テーマが含まれるといったほうが正確ですが)。このような問題を考えるにあたってどのようなアプローチが可能であるかを今日は簡単に見ていきましょう。

経済学では一人当たりの国内総生産をもって一国の豊かさを把握します。国内総生産は一国内で生産から得られる所得の合計を示しており、つまり“一人当たりの国内総生産”は“一人当たりどれだけ稼ぐか”ということを示しています。というわけで、ここでこの豊かさとは所得が大きいかどうかを意味しています。

所得の大きさによって豊かさを測っているのであれば、“なぜ豊かな国と貧しい国が存在するの？”は重要ではないと考える人もいるかもしれません。幸せていうのは、家族と一緒に笑って暮らせるか、今の仕事に誇りがもてるか、自然を見て心から感動できるか等々が重要なわけですし。ということは、一人当たりどれだけ稼げることができるかどうでもいいことなのでしょうか？

実はどうでもいいことではないのです。途上国のデータを一目見れば、皆さんが当たり前と思って享受している事柄が経済的な豊かさの賜物であることが理解できるかと思います(字が読める、きれいな水が飲める、80歳近くまで生きられるといったことは決して当たり前ではありません)。先ほど例に挙げた幸せも経済的な豊かさに支えられる部分が大きいです。どうでもいい、または重要ではないと思われた方はもう少し現実を見ましょう。

では何が豊かさを決定するのでしょうか？豊かさというやや曖昧ですが、豊かさを所得の大きさに置き換えてしまえば問題は極めてシンプルになります。つまり同じだけ働いても生産できる量(生産量)が少ないために所得も低くなってしまいます。では生産性は何によって決定するのでしょうか？生産性を決定する主な要因としては物的資本、人的資本、技術知識があります。例を挙げると、物的資本とは生産設備、技術知識は発明の水準、人的資本は持っている技術を生産に活かす能力などです。人的資本は教育であったり、また仕事をしながら技術を

高めていくなどの方法により蓄積されます。以下では教育による人的資本についてより詳しく見ていきましょう。

生産性を高めるための一要素である技術知識を高めていくためにはより高い人的資本が必要ですし、生み出された技術知識を効率よく利用するためにも人的資本が必要です。具体例を挙げると、初等教育を受けた人が家族にいるかどうか、品種改良された種を用いるかどうかに加え、さらにはどれだけ早く導入するかという点にも有意な影響を与えるということが解っています。

したがって人的資本を高める要因の一つである教育の重要性は疑いのないものなのですが、教育により人的資本を高める方法において途上国が直面する難しさが存在します。そのために世界には豊かな国と貧しい国が存在するのです。途上国が直面する困難の例としては、子供に教育を受けさせたくても、そもそも子供が学校に来ないということがあります。これは子供が家計を支える収入の一部分を担っているという現状から生じてしまいます。さらにこの事実は途上国における出生率を高めます(途上国における高出生率は働き手としての需要からのみではなく、死亡率が極めて高いという事実からも生じます)。さらにこの高出生率は子供一人当たりの教育水準を押し下げます(十分な教育を行うためには子供の数自体が少なくなる必要があります)。

このように考察を進めていくと、児童労働を減少させる、出生率を減少させるといった目標が明確になってきます。問題は明らかになりましたが、これらの問題の解決もまた困難なものです。たとえば児童労働をなくすための取り組みとして、児童労働を用いた商品は購入しないという取り組みがありますが、そもそも製造過程を完全に把握できているのか、相対的に安全な職場を子供から奪うだけではないのかといった指摘もあります。本質的には親の収入だけで生活できれば問題ないわけですから、大人の労働市場の構造がどのようになっているのか、十分な資金が確保される経済が確立しているのかといった点が次の問題となってきます。

このように複雑に絡み合った経済問題を解決していくためには物事の繋がりを解きほぐし理解することが必要であり、そのために理論が存在します。経済問題は多くのインセンティブが絡み合っているもので、ほんの一部を変えただけでも思わぬところに影響が波及するものです。理論的な考察を蔑ろにした政策提言はむしろ迷惑とさえいえるかもしれません。

## 編集後記

こんにちは、ビッグフットです。燃料代の高騰のせいで、部屋の温度を低めにする生活を余儀なくされている今日この頃、みなさんいかがお過ごしでしょうか。実は先日、この雪深い北国から遠く離れた常夏の島へと旅をしてきたのですが、その道中…なんと「足が縮んだ」ではありませんか!!?『姉さん事件です!』のあの方もびっくりの大事件! 実寸では30cm→28.5~29cm程に。ビッグフットに何が起こったのか…そしてこれは死活問題です!

これは黙ってられないと思い、この原因不明の事件を解決すべく、再び南の島へ旅立つことになりました。おっとその前に、図書館にある南国の専門家(写真家)『三好 和義』さんの本で下調べをしなければ…

というわけで、しばらく調査の旅に行ってきます。生きて帰って来れたら、またどこかで。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第29巻4号 (通巻184号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL (011)841-1161 (本館内線)2273・2274・2275 (工学部内線)7813・7814 印刷所:(株)アイワード